

## 本人、保護者、学校、関係機関の架け橋を目指して

兵庫県立東はりま特別支援学校

教諭 早瀬 確

### 1 取組の内容・方法

#### (1) はじめに

本校では特別支援学校のセンター的機能として、本校通学区域の播磨町、加古川市(南部)、高砂市を対象に地域支援として、「教育あんしん相談」、研修の協力、教材等の貸し出し、地域への公開研修等を実施している。「教育あんしん相談」では、地域の幼稚園、保育園、こども園、小学校、中学校、高等学校の本人、保護者、教員からの相談に応じてきた。研修の協力では、学校、その他の関係機関からの依頼に応じてきた。今回はこれらの取り組みの中から、主に関係機関と学校の連携に関する取り組みと、「教育あんしん相談」での取り組みについて取り上げたい。

#### (2) 関係機関と学校の連携を目指して

学校関係者や関係機関の方が連携について悩まれる時に、私がよくお伝えする話があり、ここでも紹介したい。その話では、ある学校に経済的に貧しい家庭の子どもがおり、教師は遠足を前にして、その子がお弁当を持って来られるかどうか心配するのである。そこでその教師は子どもたちにお弁当を持参させる代わりに、皆でお米を持ち寄りおにぎりを作ることに決める。その子には教師が家から持ってきたお米を遠足当日の朝にこっそりと「間違えて沢山お米を持ってきてしまっただけ。余っているからこれを教室に持っていきなさい」と言って渡すのである。無事、その子はお米を持って教室に入り、皆でおにぎりを作って遠足に出かける、というような話である。この話で私が関係機関の方にお伝えしたいことは、学校だけで対応することが困難なケースが増えている中で、この話のように個の力量や努力で対応しようとして、誰に相談していいか分からないまま問題に向き合っていることもあるということである。学校関係者に伝えたいことは困っている時に外に頼る、という発想があってもよいこと、関係機関に「助けて」とヘルプを出してもよい、ということである。

連携をうまくやっている業界に医療がある。

「医療」というワードで画像検索をすると図1のような画像が出てくる。ひと目で多職種のチームであることが分かる画像である。一方「先生」で画像検索をすると図2のような画像が出てくる。どの先生も皆「先生」なのであ



図1「医療」



図2「先生」

る。先生は時には生徒指導、時には特別支援教育、時にはカウンセリングマインドを持って問題の対応に当たることを求められる。それは悪いことではなく文部科学省も「我が国の教員は学習指導や生徒指導等まで幅広い職務を担い、子どもたちの状況を総合的に把握して指導を行っている。このような取組は高く評価されてきており、国際的に見ても高い成果を上げている」と評価している。その上で「役割や業務が際限なく担うこ

とにもつながりかねないという側面があり」「チームとしての学校」(図3)が求められると述べている。このような話をした上で、学校の先生方には、担任だけで抱え込まず、管理職や同僚の先生方、養護教諭、特別支援教育コーディネーター、スクールカウンセラー(以下SC)、スクールソーシャルワーカー(以下SSW)との連携を提案していくようにしている。相談に当たっては、問題の解決方法についてはもちろん、学校のどの先生や職員にチームとして入ってもらうのがいいのか等も関係者と一緒に考えるようにしている。そうすることで担任だけでは対応が難しいようなケースでも「チームとしての学校」と関係機関とで連携して対応できることがある。

また、関係機関と学校が連携する上で大切なことが、お互いがお互いの仕事を知ることである。先程の「医療」では、それぞれがお互いの動きをイメージできることでスムーズな連携が成り立っている。そこで関係機関の方にも学校

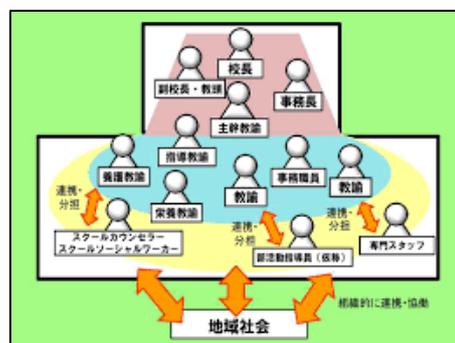


図3 チームとしての学校

出典：文部科学省(2016)

に関する情報提供に取り組んでいる。例えば、学校の組織、校長、教頭、学年主任、養護教諭、特別支援教育コーディネーター、SC、SSWの役割等について説明している。学校にいと当たり前なことでも、まだまだ関係機関の方には知られていないことも多く、連携を考える上で参考になると言っている。また他にも多様な学びの場、特に通級による指導についても正しく理解されていないことも多いため、時間を割いて説明するようにしている。また特別支援学校のセンター的機能についても説明し、例えば、ある児童生徒の支援のために関係機関と学校と本校とで本人への支援を検討、保護者の相談への対応は関係機関が主に担当し、周りの児童生徒への障害についての説明等を本校が講演会の講師として実施するなど、連携事例についてもお伝えして、目の前の子どもの対応についての連携をイメージしやすくしている。

また学校関係者と関係機関の方が実際に知り合う機会を提供することも大事だと考え、研修会の中で機会を作ることに取り組んでいる。令和元年7月には「学校と福祉が連携する方法～学校だけでは対応が難しい事案にどう立ち向かうか～」と題して、東播磨圏域コーディネーター、播磨町総合相談窓口の総合相談専門員、加古川市障がい者基幹相談支援センターのセンター長、高砂市障がい者基幹相談支援センターの副センター長にお越しいただき、各関係機関より学校との連携の具体的事例を紹介していただいた。ここでの狙いは、福祉と繋がっていない子どもたちのことでまず最初に相談できる相談先を学校園の関係者に紹介し、顔見知りになってもらい、電話一本でつながる関係を作る機会とすることであった。研修会の最後には各関係機関の方と参加者間で名刺交換を行う時間を作り、顔見知りとなっていた。実際に研修会後には各学校園から関係機関に電話が入り、連携を始めているとの報告を受けている。

以上をまとめると、関係機関と学校の連携を進めていくために、①学校の文化や学校組織の仕組みや役割分担について関係機関の方にお伝えすること、②学校の先生方にチームとして、子ども達の問題に対応していけるような提案を心がける、③関係機関、学校関係者の双方がお互いを知り合う機会の提供といったことを実践してきた。

### (3) 本人、保護者、学校の架け橋となる相談を目指した取り組み

今年度、教育あんしん相談として年間100件を超える相談に応じてきた。そこでいつも心がけていることは相談を通して、本人、保護者、学校の間で分かりあえていない部分があればそれを見つけ出し、言語化、具体化して両者を繋ぐ、ということである。次項では子どもの困り感、特に発達障害の理解に焦点を当てた取り組みを紹介したい。

### (4) 子どもの困り感を疑似体験化する

相談を受けていると、障害のある児童生徒の困り感について、保護者や関係者の理解が追いつかず、子ども達への接し方に影響が出ていると思われるケースがある。そういったケースでは障害からくる困り感を保護者や学校関係者に少しでも分かりやすく伝えることを心がけている。その為に私が活用している資料の一つがNHKの「u&i」である。NHKのwebサイトには「『u&i』は発達障害などの困難がある子どもたちの特性を知ること、多様性への理解を深めることも番組です。(中略)困難のある友達の“ココロの声”に耳を傾けながら、その悩みや特性を知り、どうしていくのがいいかを考える力を身につけていきます」とある。この番組は当事者本人の感じ方に焦点を当てており、例えば感覚過敏などについて、教科書から反射する光が強く感じて辛いことなどが具体的な映像で紹介されている。単に言葉で「この子には普通の光でも眩しく感じて、しんどくなっているのかもしれませんがね」と伝えるよりも、こういった映像を見ていただくことで、こちらが何も言わなくても「これはしんどいな」と感じ、「あの子はどんな風に世界を感じているのだろう」と想像していただくことに繋がっている。

またLDのしんどさを伝える際にいつも実施している方法があるのでここで紹介したい。まずパワーポイントで「り∟ご」のような文字と記号を混ぜたものを提示し、「何と読みますか」と尋ねる。すると多くの方が「りんご、ですか」と回答されるので「正解です」と伝え、次に「∟=ん」を見せて、読み方を伝える。そしてLDの方が推測しながら読みだり、時間をかけて文字を読みに変換しながら読んでいるしんどさがあることを伝える。その次に「では、いまから同じような文字記号をお見せしますから、読んでみてください。ただし、制限時間は5秒です」と伝え、更に「当てますから、教えてくださいね。」と追加する。そして「\$よう\$け∟の∈∟∈い」と「\$=ひ \$=ご ∟=ん ∈=せ」のような文字記号を提示し、5秒数える。5秒数え終えたら「当てますよ、わかりますか」と尋ねてから、実際には当てずに、間を置いてから正解を伝える。正解は「ひょうごけんのせんせい」である。そこで再度、読みにくいことのしんどさなどを再確認する。この取り組みには続きがあり、そこが私の一番の狙いでもある。最後に「当てますよ、と言われた時はどんな気持ちになりましたか」と尋ねるのである。多くの方は不安を感じられる。LDのある子どもも同様に「教室にいる間、読むことを当てられることへの不安を感じながら座っている」のかもしれないのである。そのことを支援者が理解していることは子どもを理解する上で大変重要であると思われる。本人のしんどさを想像することで先生方自ら「いきなり指名するのはやめて、読みの練習などをした上で、その時に読んでいるのを机間巡視で確認してから指名するようにします」など対応が変化するのである。このように障害から来る困り感や、そこから来る不安感などについて分かるということは支援を考える上で非常に大切である。

このように障害から来る困り感についてビデオやパワーポイントで説明をした後に東海テレビの「見えない障害と生きる」という映像を見ていただくことが多い。この映像には具体的に困り感についての説明は無い。「説明はありませんが、何に困っているか、先生なら分かると思いますので、想像しながら見てください」とお伝えしている。実際に見られた方の中には涙される方も多し。私自身、何度も見て、何度も目頭が熱くなる。映像の内容についてここでは詳細は述べないが、興味を持たれた方はぜひインターネットで検索して視聴して頂きたい。発達障害という見えない障害を抱える子どもたちの支援を考える上で、きっと参考になるであろう。

## 2 取組の成果

先日、兵庫県立こども発達支援センターのスキルアップ研修にて「関係機関と学校の連携を目指して」題した研修にて講師を務めさせていただいた際に、上記のような取り組みを紹介し、ワークショップでは、関係者同士で知り合い、相談しあう機会を提供した。また研修会の最後の部分で、支援者の方々が当たり前前に頑張っておられることを私なりの言葉で言語化してお伝えさせて頂いた。研修会后、参加者から「現場や親のどちらかを責めるのではなく互いの精一杯やっていることを認め合うような支援を心がけたいと思います」「人と繋がるのができた」「ワークショップで実際に話してみても、話してみることの大切さが実感でき勇気を持って連携していこうと思いました」「他の機関の方と話ができて情報を仕入れることができました」「最後の早瀬先生の言葉は心にしみました」といった感想をいただいた。本人も、保護者も、先生方も、支援者の方々も、皆さんが頑張っていることを認め合い、繋がることの大切さを改めて感じた。

## 3 課題及び今後の取組の方向

人と人を繋ぐ（出会いを作り、想いを繋げる）ことをこれまで意識してきた。今後はより精度を高め、ニーズのある所と所、人と人を繋げられるよう努力していきたい。

最後にこの場をお借りして、これまで私を支えてくださった、管理職をはじめとする先生方、相談や研修、授業等を通じて知り合った全ての子ども達、保護者の皆様、関係者の皆様、そして友人、家族に感謝の意を表します。

### 参考文献

- NHK 『u&i』 [<https://www.nhk.or.jp/tokushi/ui/origin/about/>] (閲覧日 2020年3月19日)
- 文部科学省 『資料 2-2 チームとしての学校の在り方と今後の改善方策について (答申 (案))』 ([\[https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo3/siryo/attach/1365963.htm\]](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/siryo/attach/1365963.htm)) (閲覧日 2020年3月19日)
- 朝倉隆司 (監修) 竹鼻ゆかり、馬場幸子 (編著) 『教師のためのスクールソーシャルワーカー入門-連携・協働のために-』 (大修館書店、2019年)